庭野平和財団　御中

平成１７年９月３０日

平成１６年度　最終報告書

１．学校間交流事業の目的

特定非営利活動法人　C.P.I.教育文化交流推進委員会は、「アジアの南に位置するスリランカ及びインドネシアにおいて家庭環境は貧しいが学業成績は優秀で、家族を思い国を思う心をもった青年こそ、それらの国の次代の社会を担うリーダーとしてその成長を支援して行きたい」との理念を掲げてわが国の会員が教育里親となりこれらの青年を里子として教育支援運動を推進してきた。

このたび貴財団にご助成いただいた「学校間交流」は当会の千葉地域会の会員で元学校長の鈴木康夫氏が発想し具体化したプログラムである。

このプログラムは、当会が長年にわたり推進してきた教育里親・里子交流支援活動に加えて、わが国とスリランカの小中学校児童生徒と教員同士が図画あるいは作文などの交換を行い、教育里親・里子交流ともども両国民の相互の理解と友好促進を一層発展させることが期待できると考えて当会の事業としたものである。

２．学校間交流事業の実施状況

（１）　平成１６年度の取り組み

①両国の交流学校間の児童・生徒の作品の展示

②わが国の教員のスリランカ学校への訪問交流

（２）　平成１７年度の学校訪問

３．　学校間交流事業の成果

４．　学校間交流事業の課題

５．　資料

２．　学校間交流事業の実施状況

わが国側の学校群選定は鈴木会員の地元である千葉県内を中心に折衝し,決定された。

スリランカ側の学校群選定については当会の提携先であるスリランカ日本文化センター(英文名 Sri Lanka Nippon Educational and Cultural Center)によって選定された。

そして平成１６年度には次のように，本活動の趣旨に賛同した学校の児童・生徒の作品展示と有志教員による現地交流選定先学校の児童・生徒の作品展示がそれぞれの相手校において実施された。

（１）平成１６年度の取り組み

① 両国児童・生徒の作品のの交流学校

② わが国の教員のスリランカ学校訪問

第１回　平成１６年７月２４日から３１日まで

第２回　平成１７年３月１２日から２６日まで

(ア)　　両国児童・生徒作品の交流学校(平成１７年４月現在)

市西小学校(千葉県)　　相手校　イシバサナ学校（コロンボ）

スリラフラ校（コロンボ）

山武北小学校(千葉県)	相手校アーナンダバーリカ学校（コッテ）
睦岡小学校(千葉県)	サンシプラ学校（ヌワラエリア）
大網小学校(千葉県)	サラサビ学校（ペラデニア）
福岡小学校(千葉県)	サストララヤ学校（コッテ）
東金中学校(千葉県)	イシパサナ学校（コロンボ）
東中学校(千葉県)	サストララヤ学校（コッテ）
緑海小学校(千葉県)	サッダシッサ学校（アンパラ）
丘山小学校(千葉県)	ワラハゴダ学校（ガンポーラ）
谷貝小学校(茨城県)	ゴータミ学校（コロンボ）
桜井中学校(茨城県)	ゴータミ学校（コロンボ）
玉小学校(茨城県)	ヘゴダ学校（アンパラ）

以上　千葉県内　９校
　　茨城県内　３校
　　合計　１２校

コーッテ内　２校
コロンボ内　３校
ガンポーラ内　１校
ヌワラエリア内　１校
ペラデニア内　１校
アンパラ内　２校
合計　１０校

②わが国教員のスリランカ学校訪問

第１回の訪問は昨年７月２４日(土)から７月３１日(土)まで、第２回は本年３月１２日(土)から３月２６日(土)までの期間,実施された。

第１回の訪問者は千葉県山武郡山武町立　山武北小学校の教頭、大谷秀敏氏と当活動の推進者、鈴木康夫　当会会員である。

この訪問に当たってはコーッテ、コロンボ、ヌワラエリア３地区の５校と、当会の提携先　コーッテ所在のスリランカ日本教育文化センター（ＳＮＥＣＣ）を訪問した。

スリランカ日本教育文化センター
このセンターは当会の教育里親里子活動の実施に際して里子の選抜、そして決定後の里子たちの指導、管理を担当するかたわら、週末には独自に近在の生徒･児童を大勢集めて日曜学校を開いている。
訪問者はその学生の人数が毎週千人ほどにもなること、真面目な学習ぶり、そして教師はボランティアであることなどに驚いた。

翌２６日(月)はスリランカ中央部のダンブッラ（ガンポーラ北５０キロ）にて幼稚園を見学後、当会の元教育里子二人と会う。一人はキャンディ（ダンブッラ南５０キロ）のセンターで日本語を教えるが、昨年日本語能力検定３級に合格,もう一人は本年秋に日本語４級を受験の予定であった。

７月２７日(火)サンシプラ校（ヌワラエリア）訪問
キャンディから３時間南下してヌワラエリアのサンシプラ校を訪れる。玄関入口には鈴木会員が前回持参した交流資料が掲示してあり資料が大切にされていることが伝わる。 また家庭科の趣のある教室内一杯に絵、刺繍、工作模型などが展示され、「これら作品は睦岡小学校、高階小学校へ贈られる予定のもの」、と校長から説明され、その校長先生から睦岡、高階の両小学校長宛の手紙も託された。日本から持参した睦岡小学校の交流資料には現地シンハラ語訳を依頼した。また山武郡体育協会からあずかった制服１２着も手渡したところ、とても喜ばれ、帰国後更に３０着を送った。帰り際,二人の男子生徒から手紙を貰う。「外国の人に手紙を書くのは初めてで返事が欲しい」という。将来の交流には生徒同士の手紙のやりとりに発展させたい。

７月２８日(水)アーナンダ　バーリカ校訪問
２７日(火)夜コロンボに帰着し、翌日はコーッテにアーナンダ・　バーリカ校を訪問する。本校は同行の大谷教頭の勤める山武北小学校の交流相手校で、校門でウィターナ校長と楽隊の歓迎を受け、式場には職員と１００名ほどの生徒がいる。ここには日本語学級もあり式は両国語で行われた。歓迎の踊り、挨拶,作品贈呈と式次第は進む。
ウィターナ校長挨拶要旨；
「日本は敗戦を越え大きく発展した,学ぶところ多い国である。敗れた日本にスリランカは沢山の援助をしたが、今は日本から多くの援助を受けている。
スリランカには優れた人材がいるが国が貧しく十分な教育ができない。このような草の根レベルでの交流を進めて互いに啓発し向上して、両国だけに止まらず広く世界平和にもつなげて行きたい。」
大谷教頭からは山武北小学校生徒の作品と手紙が贈呈されたが、手紙にはバーリカ校から送られた絵の写しと感想が添えられていた。
大谷教頭挨拶要旨；
「この交流を通してお互いの学校の子供たちが仲良くなると共に、世界の子供たちも仲良くなれるように」
結びに大谷氏は「海」,「夏の思い出」など日本のの歌を披露した。音楽に国境無し、が実感された。今後の訪問に歌唱を考慮したい。

教室訪問
式後,日本語教師イローシャさんの案内で教室を訪問し、質問を試みた。「学校は楽しいか」「勉強は好きか」「友達と仲良しか」「上級生は下級生の面倒をよくみるか」「両親を尊敬するか」などで，全てに「はい」の答えが返ってきた。「いいえ」の答えが「宿題は無いほうがよいか」の質問に返ってきたのは予期しない事だった。

日本語教師アウシャディ嬢と面談
以前、バーリカ校の日本語教師であったアウシャディさんとホテルで

再会、バーリカ校時代の覚束ない日本語からは抜け出ていて,現在は大学で日本語を学んでいると言う。学校交流を生かし、彼女は大網小学校の佐久間先生、五木田先生らと文通している。
彼女は文通を介して日本語の上達を志し,日本のことをもっと知りたいが,返事をすぐには貰えなくて寂しいと訴えた。

７月２９日（木）サストララヤ校、イシバサナ校訪問
サストララヤ校では校長、教頭、生徒会役員の出迎えを受ける。
生徒会役員は正式な客を出迎える時着用する背広姿で，校長室には各学年の代表が待っていてくれた。
持参の東中学校の部活動についての手紙と写真，絵などを説明付きで手渡すと、部活動について興味を示し，校長先生も熱心に聞いていた。柔道は知っていたが剣道は知らなかった。
教頭先生の案内で教室をまわる。子供たちは明るく礼儀正しい。40数年前の日本の子どもたちと同じだ。バーリカ校と同じ質問を試みたたが，答えは殆ど同じだった。
壁面には大きな蚊の絵があり、デング熱の流行に対し予防の仕方を書いてある，との説明があり、他の病気が流行れば絵も描き変えるとのこと。スリランカの地図、シンハラ文字、タミール文字の一覧、人体内臓の図などのほかシンハラ王朝のコーッテ時代の掲示も興味深い。
踊り，歌など伝統文化も教育課程に組み込まれている。教師自作の曲の練習、テレビ出演体験ある男子の踊りの練習など自国文化に対する子どもたちの誇りが窺がわれた。

東中学校への多くの作品を預かった。中には玉ねぎの皮で描いた鳥の絵，椰子の葉で描いた家族の絵などわが国では思いもつかぬ手法で描かれた絵もあった。

イシバサナ校は現地有数の有名校である。小学２年生から日本語学習があり、専門教員も現地人４名に日本人２名がいる。コンピューターも学級人数分揃っており図書館も充実している。
歓迎式場には各学年の代表が集まりシンハラ語と日本語併用で進められた。歓迎の踊りと、校長、教頭先生の挨拶があった。
校長先生挨拶要旨；
「日本とわれわれの学校の子どもたちが友好関係を築くことを望む。はじめは赤ん坊のようなこの交流も互いに励ましあってより良いものにしてゆこう。そして将来二つの国がより良い友好を築くように期待する。日本語での交流ができるようになるともっと良いと思う。交流をしてくれる東金中学校と市西小学校の皆さんに感謝する。」

次に子どもたちによる日本の歌「象さん」など２曲が披露された。
レパートリーは沢山あるそうで、日本への憧れを示している。

日本語の学習に子どもたちは意欲的である。この学校のスリランカ人日本語教師は４級取得者だが、今年３級を受験するという。
彼女達からビデオレターをもらったが「スリランカはきれいな国です。ぜひ来てください。」「日本に行ってみたい。子どもたちも、そう思

っています。」との発言は彼等に共通の思いかもしれない。

東金中学校と市西小学校宛の交流資料を預かったが,今回は子どもたちからの手紙が多く、日本語のもの,英語のものが半々位で、ざっと目を通し気がついたことは、「日本への憧れが強い」,「自分の学校,自分の学級に誇りを持っている」,「家族を大事にしている」ことであった。翻って日本の子どもたちはどうか。何かに対する夢,憧れをもっているだろうか。自分の学校,学級に誇りをもっているだろうか。家族を大事にしているだろうか。

これらの手紙が日本の子どもたちへの刺激となれば幸せである。

教育里子セパリカさん宅訪

この里子の家はコーッテのスリランカ日本教育文化センターの傍らにある。センターの代表は僧侶であり、この一帯は経済的に恵まれない人たちがお寺の援助で生活している。家は板囲いの粗末なもので父親は日雇いだが仕事の無い日も多いと聞いた。母親に弟妹の５人家族である。彼女は長女で１４歳の９年生。終始笑顔で面談に応じる彼女からは経済的に恵まれない環境にいることを想像できない。朝は５時に起き７時に学校へ。下校後,昼食を取り２,３時間は勉強。家の手伝いは料理もする。夜はランプで勉強し９時に夕食,１０時就寝。

彼女の得意学科は数学、日本語もセンターで勉強しているが日本については殆ど知らなかった。将来は医者になりたいという。友人は多く,追いかけっこやバドミントンで遊ぶ。友達とは決して喧嘩をしない。このことは他の子どもも同様に答えており、喧嘩はスリランカの学校ではご法度なのであろうか。

教育里子デーピカさん宅訪問

この里子の家はセンターから一寸離れた場所にある。バーリカ校の学生で１８歳,１２年生で一人っ子。父親と最近まで一緒に生活していたが,今は叔母の家に住む。母親とは小さい時に別れたままだ。

日本語を学んで１年,今年は４級を受験する由で鈴木会員の質問の幾つかはわかり通訳を通ぜずに答えた。得意課目は商業と会計で日に６時間は勉強するという。将来は公認会計士が夢と答える。日本については「広島」,「桜」,「火山」を知っている。今までに一番嬉しかったのは,今回学級委員になれたことだと言った。

７月３０日(金)　スリラフラ校訪問

この学校には鈴木会員が昨年１１月に訪問している。当時は全く聞けなかった「こんにちは」という日本語の挨拶を子どもたちから聞くことが出来た。市西小学校との交流が始まってから子どもたちの日本語に対する関心が高まってきた由である。まだ単語程度ながら熱心に先生に質問をするという。ただし大部分の学校の場合と同じようにこの学校には日本語教室は開設されていない。この学校には経済的に恵まれない家庭の子どもたちが多く、また学校自体も予算不足で備品も乏しい様子だった。

市西小学校長からのメッセージを渡した後,美術室に案内されると、本年３月に市西小学校から贈られた作品が壁一面に張られ、天井中

央から千羽鶴も四方に広げて吊り下げられていた。習字の作品も貼られていたが字が上下逆になっていたのは無理からぬことであった。
６年生たちは訪問者の為に歌や踊りを披露したり、黒板にﾁｮｰｸで上手に絵を描いてくれたりした。絵の出来は即興にしては驚きであり、校長の「能力のある子が経済的に恵まれないので十分な教育を受けられない」との言葉が胸をついた。それでいて子どもたちは純真で底抜けに明るい。こういう子どもたちと学んでいる先生方は幸せに思う。

低学年の教室で工作を見学する。土をこねたり、紙を使う造形には，どの子の作品にも個性があり、制作に没頭する姿が美しい。

子どもたちが日本の子どもたちと手紙の交換を希望していると聞き、次には「思い・考え」の交換へと発展させることで学べることも多い筈である。子どもたちのはちきれそうな笑顔に送られて校門を後にした。

７月３１日(土)　帰国　以上で第１回訪問は終了した。

（２）平成１７年度の学校訪問

第２回の訪問は本年３月１２日(土)から３月２６日(土)まで行われた。予算のことも考慮し訪問者は鈴木会員と、当地に滞在中で元高校教諭の中濱美夜子会員とした。運転者兼通訳ナンダセーナ氏が同行。

訪問日程は下記の通り
３月１２日(土)　成田発
３月１３日(日)　スリランカ日本教育文化センター打合せ（コーッテ）その後、キャンディへ移動
３月１４日(月)　キャンディからアンパラへ移動
３月１５日(火)　ヘゴダ学校訪問と津波被災地視察
３月１６日(水)　サッダシッサ学校訪問　キャンディへ移動
３月１７日(木)　サラサビ学校、ワラハゴダ学校訪問
３月１８日(金)　サンシプラ学校訪問　コーッテに帰着
３月１９日(土)　交流資料整理
３月２０日（日）スリランカ日本教育文化センターと打ち合せ
３月２１日（月）津波被害地視察、クルンドハタハタクマ幼稚園へ
３月２２日（火）アーナンダバーリカ学校、アーナンダサストララヤ学校訪問
３月２３日（水）スリラフラ学校、イシバサナカレッジ訪問、バーリカ学校運動会参加
３月２４日（木）ゴタミバーリカ学校訪問、交流希望学校訪問
３月２５日（金）スリランカ日本教育文化センターで打ち合せ
コロンボ発帰国へ
３月２６日（土）正午　成田帰着。

３月１４日(月)　キャンディからアンパラへ移動
キャンディからは難路の山を越え、里を離れた平地をアンパラへ行く。目指した寺には１６日に訪問予定のサッダシッサ小学部のプラディープ氏が待ち受けてくれ、事前の打ち合せができた。
アンパラのお寺では少数民族タミール人が２千人も津波で避難していた。主民族シンハラ人には１９８７年に僧侶３１人が虐殺された

事件があったが、僧侶は「非常時には宗教も恨みもない」と述べ村人は彼等を親切に受け入れた由である。

３月１５日(火)ヘゴダ学校訪問。アンパーラ地方の津波現場視察

ヘゴダ学校訪問（アンパーラ）
全校生２５７名のヘゴダ校の交流相手校は茨城県の玉小学校で同校生作品の展示序幕式があり、ヘゴダ校からも作品贈呈があった。訪問者からは日本文化を紹介、玉小学校の位置を示した地図と千葉地区有志の寄付金を贈り学用品などの不足に役立てて貰う。先生方との会合では日本の教育制度、宗教などの質疑応答を行う。

津波の現場は砂に埋もれ身元不明者は６千人という。姉を、また息子を失った人々の悲嘆、家も船も無になった人の悲惨さが痛ましい。

３月１６日(水)　サッダシッサ学校訪問
校舎の壁に「サッダシッサ校と緑海小学校の友情プログラム」と書かれ、その下の幕を引くと緑海小学校の子どもたちの作品が掲示されていた。式典は校庭で釈迦への祈りから始まり、当方から緑海小学校生の激励文、３人の子たちへの賞状と副賞それに寄付金２万ルピーを贈る。教室を回ると踊り、或は日本の子たちの習字を教材とした書写があり日本理解への糸口になればと思った。

３月１７日(木)　サラサビ学校・ワラハゴダ学校訪問
サラサビ学校の歓迎式、全部は持ち帰れないほど多くの贈り物を受けた後、教室を見る。倉庫のような教室ですし詰め状態で子どもたちは懸命に学ぶ。　いつもながら素直で純真な姿が印象に残る。

ワラハゴダ学校では浴衣を着た女子を先頭に歓迎を受け、収穫踊りや日本の歌が披露された。相手校の丘山小学校はシンハラ語をまぜて手紙を書いてきたので喜ばれた。本校の日本語学習は前任校長のアーナンダ氏が指導している。

３月１８日(金)　サンシプラ学校訪問（ヌワラエリア）
山武群市体育教会から寄付された制服を着た楽隊が両国国歌吹奏、国旗掲揚後、生徒からの花の雨を浴びながら式場へ入る。
交流相手校　睦岡小学校に送る作品の選定を一任され、鈴木、中濱会員が選んだ。前回、睦岡小学校に送られた作品の中、優れたものについて日本の専門家に依頼して批評して貰いシンハラ語に翻訳して作品の写しと共に渡した。

３月１９日(土)　交流資料の整理
膨大な作品群を持ち帰り分とデジカメに収めるものとに仕分ける。

３月２０日(日)　スリランカ日本教育文化センターにて打ち合せ
スリランカの子どもたちの生活や考え方を日本の子どもたちに伝えたいので「私の１日」、「私とお寺」などの題で作文を書いてもらうように決めた。日本の交流校に配布したいと考えている。

３月２１日(月)　津波被災現場視察
省略

３月２２日(火)　アーナンダバーリカ校、アーナンダサストララヤ校訪問
山武北小学校と交流するバーリカ学校ではエアコンつきコンピューター教室も見学、各学年とも週１回学習の由。校門脇の壁に校長の発案で日本から学んだ「整理。整頓。清潔。」を女生徒の手で絵にしたものが描いてあった。この校長が農業研修で日本に来たことがあり、その時に聞いた言葉と思われた。
サストララヤ校は東中学校と交流していたが、東中学校に都合で１年間休みにする事となり、代わりに福岡小学校と交流をする事になった。先方は子ども同士で一対一の交流を希望するが。言語は英語なので日本側は小学生では難しいと思った。

３月２３日(水)　スリラフラ学校、イシバサナカレッジ訪問
スリラフラ学校は市西小学校の交流先である。２８人の８年生に質問すると、こんな答が返ってきた。○好きな教科は数学、英語、国（シンハラ）語。○父母には逆らわない。悪い事をしたら叱られる。○尊敬する人は両親、先生、お釈迦様、僧侶、目上の人。○日本について知りたいことは「子どものこと」「空手」「音楽」「宗教」「歴史」「版画」この学校の設備は整っていない。生徒の９５％は家庭が貧しい。そんな背景でも明るさを持っている。
イシバサナカレッジの相手校は東金中学校で交流を始めて２年になる。校長はいろいろスポーツの会長をしており、その関係で３回も日本を訪れており、人的な交流もじつげんしたい、と述べた。

３月２４日（木）ゴータミバーリカ学校訪問
本校は茨城県の谷貝小学校、桜井中学校と交流を始めたばかり。この日は「語学の日」で様々な言語によるスピーチが行われていたが、日本語を勉強中の１１,１２年生２５人が歓迎してくれて日本大使館主催のコンテスト入賞者３人が、その時の演題で流石のレベルのスピーチを聞かせてくれた。わずか６ヶ月から１年くらいの学習で訪問者の話す日本語も通訳は不要で素晴らしいと感じた。子どもたちに質問したら次のような答が返ってきた。

○ 全員が塾通いしている。○家での学習は２～３時間。○先生は優しい。○日本に行きたい。大学で学びたい。○将来は先生、日本語の先生、日本語翻訳者、新聞記者、大使館員○日本のこれが知りたい。「歌」「地震」「代表する木、花」「季節」「若者のファッション」

３月２５日（金）スリランカ日本教育文化センター打ち合せ
訪問先の各学校で預かった交流資料は船便にすれば交流相手校に届くのが遅くなる。極力、選び抜いて携行荷物にして持ち帰りたいのでセンターの助力を仰いだ。

３月２６日（土）成田に１１：５０帰着した。

３．学校間交流事業の成果

（１）　相互の関心の高まり

わが国も子どもたちはスリランカはじめアジア全体の国に対を高め、スリランカの子どもたちは日本の様々な分野の興味や関心を示し、とくに日本語習得に意欲を高めている。またマトラ沖地震に伴うスリランカの津波被害や日本に於ける地震や洪水の被害について双方の子どもたちの反応は身近なこととして捉えられるようになった。

（２）　協力活動の積極化

スリランカにおける津波被害者の為の支援活動では、緑海小学校の場合には交流の相手校に被害者がいて、送られた絵の中に被害の様子を描いた作品があったことから児童会が全校児童に呼びかけて募金活動を行うと共に,励ましの絵に手紙を添えて相手校に送った。他の学校でも相手校の様子を知り、自分たちにできることは何か、を模索し始めている。

（３）　学校交流の活用

今年の事業で取り組まれた現職教頭の学校訪問は参加教員の意識改革をもたらし、その体験は同僚も巻き込んで子どもたちにも伝えられ子どもたちの変容のきっかけにもなろう。
わが国の教員たちは交流活動を日常の教育に取り入れ、子どもたちの目を先進国だけでなく発展途上国にも向けて自分たちの生活や考え方を見直させる契機としたいと考えている。鈴木会員は今年度、児童、教員に対し２度の「出前授業」を行って現役教員の要請に応えた。今後も実施したい。

（４）相手国児童生徒への情報供与

日本についての情報の乏しいスリランカの教師、子どもたちにとって展示会は貴重であり、これを学習に生かす試みも始められた。スリランカ側でも日本の子どもたちに知って欲しいことをシリーズとして各学校に配布する計画が進んでいる。

（５）　交流内容の深化

今年度、２組の交流校で送られた中の優れた作品に賞状を贈る試みや日本側で作品批評を行い作者に渡す試みを始めた。
送られた手紙に返事が書かれるなどのこだま現象がみられる。
またスリランカ側には人間同士の交流をしたい、との希求も生れている。

４．学校間交流事業の課題

以上の記述の内容、成果に照らし今後の交流の方法、あり方などの課題も多いのでそれらに触れてみたい。

（１）　訪問について
（２）　経費の確保
（３）　担当人材について
（４）　招聘について

（５）　話題の展開と継続

（１）　相互の学校訪問について
活動内容の向上には、例えば、スリランカから預かった作品群について交流相手校に説明できる十分な資料ガ欲しい。日本の文化などを伝える企画も取り入れたい。わが国では「知りたい」、「何かしたい」子どもたちに応える「出前授業」を計画的に行い、教員や保護者にも教育現場での活用を働きかけたい。

（２）　経費の確保
今年度は、貴財団からの助成金のおかげで上記の事業をなし得たが次年度については現時点で不明である。確実な年次予算を確保したい。

（３）　担当人材について
今年度は、スリランカでは当会の現地事務所ならびにスリランカ日本教育文化センターのスタッフの協力を得たが、現状では相手校すべてについて実情を把握するには至らないので、現地で交流活動への助言者を得たい。これも経費を要する課題だが。

（４）　子どもの招聘について
将来の展望として、両国の子どもたちが、両国の学校に招聘される相互交流を視野にいれたい。市町村・県・国レベルで協賛が得られればと思う。

（５）　話題の展開と継続
絵、手紙など子どもたちの作品の交換に止まらず、環境、平和、未来の生活など人間として共通した話題についての意見交換が行われ、こだまのように反響しあう活動に発展させたい。

以上

[学校訪問についての感想]

中濱美夜子会員寄稿

A.スリランカの学校
主に低学年の参観をした。何処の学校でも生徒は授業に生き生きと取り組んでいる。先生は絶対的存在で生徒はその指示にきびきびと従う。こじんまりした教室に４５人以上の生徒がくっつくように坐っていても、だるそうな子はいない。校内で行き逢うと生徒はみな、目を向けてにっこりする。皆、学校は楽しい、勉強は好きだ、と答える。ちょうど５０年前、筆者の通った日本の小学生たちはこんな幹事だった。
設備や教材が乏しい中で、瓶の蓋、様々な豆を使った数の計算などの先生の工夫も多くみられた。こんな様子をぜひ日本の小中学生に知ってもらいたい。物の豊かな日本では拾得物を取りにも来ない現実がある。
当地の学校は同じ国立でも施設や設備に格差がある、都市と田舎の違

いに加えＯＢや校長の実力の差も出るとか。新入学は居住県内なら書類審査だけで何処でも良いとなれば上級校への合格率の高い学校に遠くからでも入学したい訳で、みたところ、そういう学校ほど設備も良い。

生徒は家で２～３時間は勉強するといった。下校は２時だから勉強も家事の手伝いもする時間はあるが、大抵の生徒が普段の授業のために塾に行っている。個人的に先生の家に勉強に行ったり、先生に家庭教師に来てもらう場合もある。貧しくて教授料を払えない生徒の多い田舎では学校の先生が補習のような形で放課後に無償で面倒を見ているところもある。

スリランカの学校の教員は副業も許されるので学校の先生が塾の先生を兼ねる場合も多い。教員には女性が多く、男性は２割くらい。給料は安いが、家庭との両立がしやすく、男女差別もなく、尊敬されるのでやりがいもあるし、社会的にも良い仕事と認められている。将来、先生になりたいという女子生徒は多かった。

B.学校間交流の今後

①儀式より授業参観、意見交換の時間を、

多くの学校で訪問者のために歓迎式典をやってくれた。来賓の挨拶、生徒の踊りや歌の披露などで２～３時間は経過する。儀式を大切にする文化であることは分かったが、せいぜい数時間の訪問であるから、これからの訪問に際しては普段の学校の授業を見せて貰うことと、持参した日本側の絵、習字などを説明して意見交換をすることに分けて対応していただけると、先方の授業を中断する迷惑も少なくてすむのではないか。

今回初めて訪問した学校で、昼休み時間を利用して教員数名と話しあう機会が持たれたのは良かった。先生たちは日本の学校の授業の方法などに関心があるようであった。交流方法に関する希望や実際的対処の仕方、問題点などを具体的に率直に話し合いたいものである。

②生徒同士の交流の仕方

ある学校では、学校全体での絵や作品の交換ばかりではなく、個人で文通を積極的にやりたがっている生徒がいることも分かった。

全体の交流が深く、広く発展していけば嬉しいことである。この場合、言葉は日本語ではなく英語である。中学ではじめて英語を習う日本の生徒にとっては少々問題があるが、教員ばかりでなく家庭や周囲の人々を巻き込んで協力をお願いするしかないであろう。これが実施できれば生徒自身の英語の勉強にも役立つ。自宅のパソコンでインターネット通信のできる生徒もいることであろう。

スリランカの学校では、まだインターネットが完備されているところは少ないが、遠くない将来には学校同士のネット通信も可能になるであろう。そうすれば交信の費用も飛躍的に安くて済むし、文通の速度の向上は言うまでもない。個人での交流は特定の生徒に限られているのに比し集団での交流はどの生徒も参加出来る点で意義深いものがある。

対等な立場でお互いの文化を知り、リアルタイムで授業に生かす、問題を提起し意見を交換する、協同して取り組むなど夢が広がる。

以上

５.資料

添付:スリランカ地図、

毎日新聞記事(平成１７年３月２６日)で報道された緑海小学校の実践活動、
ディスク：２００４年度　学校間交流のまとめ、

以上